

に、「河越千句」から何か歴史上の事実を汲み取るうとするならば、それぞれの百韻の発句・脇句に注目せよということになってくるわけである。

なぜ河越城内の三芳野神社の前が連歌会の場所に選ばれたのかと言え、一般に連歌会は広く見晴らしのよい場が好まれたこともあるが、三芳野神社は古くは三芳野天神と称し、菅原道真を祀っている。天神は実は連歌の神なのである。このことも大きく関係していると思われる。社前で行われる連歌は多く法楽連歌と言われ、神仏を樂しませ、功德を積み、あるいは願いごとを叶えたりするために催し、それを神社に奉納するものという。この「河越千句」は、法楽連歌として誕生したのであるという見えてくる。

四

さて第三の句は、宗祇が詠んでいる。ここでは第三になつていて、次の百韻では発句を詠んでいるので、やはり敬せられていたことがわかる。「うくひすの声は外山の陰芽て」が詠出されると、脇句はこの句と一首を形作るので、「ゆきのはるかせ」は必ずしも白梅を散らす風ではなく、文字通り春の雪を運ぶ風であつてもよくなる。「外山」も特定の地を指すわけではない。一種のフィクションをもつて句境が変化して行くことになる。なお前述の「て止め」がこの句になされてはいるのかわからず、第三に第四の句が付き、以下続けられるうちに季節は秋になつたり、場所が海辺になつたりして行く。各句の解は紙幅の関係で省かざる

を得ないが、興後(後の猪苗代兼載)の所で一巡した後の句は、この順で詠まれるわけではなく、口頭で好句を出した者の句を宗匠の心敬が選び、それを執筆と称する役の者が懐紙に書き取って進んで行くのである。この千句で一番多くの句を詠んでいるのが心敬、次が宗祇、続いて道真というの、興行の経緯から推してもうなづけの結果であろう。

ところで、この「河越千句」が正月十日から十二日の三日間で行われたと前述したが、そのことを示す証拠が、これらの作品から見出せるのかというと、それはまさしく指摘できる。「朝何第一」の百韻に続く「何人第二」以下の百韻のそれぞれ発句・脇句を掲げてみよう。「朝何」「何人」などは賦物と呼ばれるが、この頃には形骸化し、ほとんど用をなしていないので、ここでは説明を省く。

何人第二

遠く見てゆけはかすまぬ春野哉

明る木すゑののとかなるいろ 宗祇

何船第三 山かせに松の葉とけて雪もなし 中雅

野へもみとりのはるををしる比 長敏

山何第四 うくひすに明ほの残す声もかな 印孝

おもかけ遠く月はかすみて 永祥

白何第五 春風に露はさみたれ柳かな 幾弘

河辺の波のかゝる若草 興後

初何第六 夕月夜かすむはかりの風もかな 長敏

袂はしるやまよふ梅か香 長利

薄何第七 春も来て帰らんゆきの朝戸哉 修茂

かすみをやとせあらしふく山 宗祇

何路第八 日そさむき去年とやいはん朝曇 満助

かれたる木々にこもる初花 幾弘

二字反音第九 春見ても花には速き千くさかな 義藤

さくらにははせさむき朝露 印孝

何木第十 梅さきぬなほ山さとおもふかな 道真

こゝろのはなの人さそふ比 心敬

(ここは千句の終わりに当たるので最後の二句も示す)

若髪になりかへるこさうれしけれ 敏

老をやしなふ滝そひさしき 祇

「朝何第一」の発句・脇句は時刻的に見て朝の景物を詠んだ句と言え、賦物の「朝何」というのもそのことを語つていよう。何人第二二二)になると霞が晴れて昼ごろになつた様子が窺われ、「何船第三」では午後の陽の中の春景色が目に浮かぶであろう。ところが、「山何第四」になると、明らかに早朝暁天の発句・脇句となる。この間には夜があつたと見て間違いない。すなわち第一口目は三百韻詠

んだところで終わり、二日目はこの「山何第四」から出発したことが読みとれる。この日は「初何第六」までの三百韻を詠んで終つたことは、容易に理解できよう。十一日の月であれば、夕方ごろには昇る。この日は、ずいぶんと時間がかかったようである。第三口目は「薄何第七」から「何木第十」まで、かなりの急ピッチで進めたらしく、「何木第十」の発句・脇句には、日暮れを思わせる語はない。最後の百韻は、全体を引き締めまとめる意味もあつてだろう。発句道真、脇句心敬、しんがりの挙句は宗祇というメンバーで終尾を飾っている。三日間にわたる「河越千句」の制作状況のあらましは、右の如くであつたと思われる。

五

然るに、「河越千句」をめぐる問題として、次のようなことがある。宗祇が後年自ら撰じた家集中に「老葉」という集のあることは前述した。その再編本に、「何人第二」の発句「遠くみてゆけはかすまぬ春野哉」が詞書を冠して採録されており、そこには「太田備中入道のやどりにて、心敬僧都など侍し千句に」と記されている。備中入道とは道真のことである。このことから、「河越千句」は太田道真の別宅で行われたのだらうと推す研究家がある。すると「朝何第一」の所で述べた私の河越城内三芳野神社前説は、否定されるかみえる。しかし、私は「何人第二」の百韻が道真宅で詠まれたとしても、全体としては矛盾はないとみる。千句を詠むのに、三日間同じ場所に

居続けて詠んだとは考えないからである。百韻ごとにまとまりをつけていけば、その都度場所替えをした。そうあつてこそ、新たな発句が生まれるものではないだろうか。巡りの最後「何木第十」の発句は「梅さきぬなほ山さとおもふかな」で、再び「梅」が詠まれる。これは開始場所の三芳野神社前に再帰して詠んでいることを語る句であると私はみたい。また「何人第十」の宗祇の挙句「老をやしなふ滝そひさしき」は、千句全体の挙句でもある。それ故この句は、発句・脇句に適う実景を基にした句になつてはいるのではない。フィクションの滝ではない。河越城内にあつたであらう湧水を指しているのではないかと想像する。どこまで信じてよいかは疑わしいが、河越城七不思議の一つに「天神洗足の井水」という伝説がある。道真・道灌が河越城の堀に張る水を求めていた時、一人の老人が泉水に足を浸し洗っているのに出会う。その水源地を尋ね、その水を堀に引いた。老人は三芳野天神の化身であつたらしいという話である。老人の真否は措くとしても、当時三芳野神社境内か近辺に、滝の如き湧水のあつた可能性はないように思われる。宗祇は、その水の久しきことを詠じ、もつて千句の結びとしたのではなかつたらうか。まさに三芳野天神の社に奉納されるにあふさわしい、文雅ゆかしき「河越千句」であつた。なお宗祇はこの後、三十二年後の文亀二年(一五〇二)に、再度河越を訪れ、死を直前にして、千句の連歌会を張つたという。作品は遺っていない。